
自裁

綾野雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自裁

【Zマーク】

N1970D

【作者名】

綾野雅

【あらすじ】

一筋の光すらも通さぬ闇の中。駅にはたくさんの人人が集っていた。そこで少女は不思議な老婆に出会う。老婆は話し出す。遠い、昔の物語を…。

真つ暗な闇の世界。
そこに少女はいた。

周囲にはたくさんの人・ひと・ヒト。

そこでは誰もが灰色のぼろきれのようになつたみすぼらしい服を着ていた。

少女もまた、しかし。灰色のドレスは腰にサテンのリボンがついているものの、スカートの裾は擦り切れてぼろぼろだし、頭頂部で髪を結わえた黒いリボンもよれよれでとにかく虫が喰つたような穴が開いていた。

ふと顔をあげると、一つと二つと大きな人ばかりが出来ているのが見えた。

何をしているのだろう? 何か楽しいものもあるのだろうか。

そう疑問に思つた少女はそちらのほうに歩いていつてみるとこいつた。

少女は人の合間をうまく縫つて、その人だかりの前に出た。そうしないと背の低い少女には何も見えなかつたからだ。 そうまでして期待していた何かは少女の目の前に現れなかつた。

ただあつたのは、小さな木造りの椅子に腰を下ろした年老いた老婆だつた。いや、本当は老婆などではないのかもしれない。なぜなら、その顔は誰よりも分厚い灰色のフードがつくる漆黒の影に覆われて

輪郭すらも見ることはできなかつたからだ。

けれども少女はその人を年老いた老婆だと確信した。その確信は、老婆から出た声質からは少なくとも正しいものであるようだつた。

老婆は他の人のものより暗い漆黒の服を着ていたが、その着物には全くと言つていいほど綻びは見当たらなかつた。そしてその老婆が腰掛ける木の椅子はこの全てが灰色の闇の世界ではまるで異質なもののように思えて、やはりその椅子に腰掛けるこの老婆もたくさんいる人とは異なる、異質なものに違ひなかつた。

その老婆は少女のほうを見ると（正しくは真中が黒くぼっかり開いたフードがこちらに向いただけなのが）、そのしわがれた手を動かして皆に座るよつ促した。

皆がやはり黒い砂でできたような地面に腰を下ろすのを見ると、やがて老婆のしわがれた声がゆっくりと話を始めた。

「みんなの列車まで、しばらくの暇があるようですね。それまで私の話を聞きますか。・・・そうですか。ではお話するといたしましょう。ある女の物語を…」

まぶしい光で埋め尽くされる世界にわたしは立つていった。道にはたくさんの人に行き交い、車が溢れている。頭上では生まれたばかり

の雛鳥たちが首がもげるかといわんばかりに伸ばし、けたたましく鳴きながら餌と共にじき戻つてくるあるひつ母鳥の影を待つていた。

わたしはとある小国で、「よく普通の家庭に育つ、ビルにでもいる普通の学生だった。成績はたいして気合を入れて勉強しなくてもいつも上位10番には入っていたから、もしかすると平均的な学生よりも少しは頭が切れるほうだったかもしれない。特に目立つことは好きではなかつたから、周囲からはよく言えばおとなしく、悪く言えば何を考えているかわからないと思われていたようだつた。

両親はそんなわたしによく言つた。どうしてお前は他の普通の子のよづになれないの、と。

さつきも言つたように、わたしは別段、他の同年齢の生徒と変わつていたわけではなかつた。ただ病氣がちな母を見て育つたわたしは幼心に責任というものを感じていて、それで子供らしいよく言えば無邪氣で、けれどもその裏を返せば利己的な行動や態度を取ることが出来なかつただけだつた。

そんなわたしの世間一般の型にくくるなら「子供らしくない」だろう、冷めた態度がご近所の奥様たちの勘に触つたのは当然のことだつた。彼女らからの嫌味への対処。それが例の両親のわたしへの言葉だつたのだ。自分の考えではなく、他人の言葉に翻弄される両親にわたしは内心反発していたが、その気持ちがわたしの口をついて出ることはなかつた。説明したところでわかつてもらえるとは思わなかつたからだ。周囲にいる多くの人が外見だけでわたしを型に嵌めてののしつた。誰もその真意を知ろうなど思つてはいやしない。だから、人がどう思おうとわたしは一向に構わなかつた。

自分がここにいる意味は、ただ一つ自分のなすべきことをするため

にある。他の誰の意見も関係なく、ただ、その責任を遂行し完了する。わたしの心の奥底にくすぐる、その責任だけがわたしの唯一の理解者であった。

2・選択

時が経ち、わたしはその責任の半ばまで遂行をとげた。その責任とは経済的に自立して、今は年老いた両親の面倒を見ることだった。その目的のためにわたしは脇目も振らず突き進んだ。ある日、自國では責任を果たすことに限界があることに気づいたわたしは、遂行が可能でありそうな別の国へと移ることにした。そんなわたしをある者は自分勝手だと罵倒し、ある者はその意志の固さに畏怖の念を示していたが、わたしは合意も変わらず氣にしていなかつた。必要な教養を習得し、その国で平均と言われる収入以上のものを手に入れたわたしの前に、ある選択が掲示された。

それは母国と異なる場所でわたしの目的を達成する上で決まりごとのようなものだつた。つまりはその国のニンゲンになれ、とこういうことだ。わたし一人でいるならそこまですることはなかつた。けれど年老いた、これから先あまり役に立ちやうもない両親を見るならそれぐらいの覚悟をさせとこうこうことらしー。

わたしは当然のことながら迷つた。わたしがここにこうしているのは幼いころから感じている責任を果たすためであつて、ここにニンゲンになりたいとか、生まれた国のニンゲンをやめたいとか、そういうことではなかつたからだ。

けれど、と思った。

わたしはなぜここにいるのか。今現実にいるこのちっぽけな場所のことではなく、この世界にいることの意味を考えたとき、わたしは自分の成すべきことを見つけた。

そうしてわたしは新しいニンゲンになることになった。

3・疑念

けれども問題はそれで終わらなかつた。本当の問題は後になつてからやつてきた。

それは新しいニンゲンになるために通らなければならない「ある儀式」の中に潜んでいた。その問題を聞いたとき、またかと思つた。大人になるということは、わたしの両親のように自分の意志ではなく、他人の意見によつて自分を殺すということなのかもしれない。けれどわたしにはどうしてもそれができなかつた。

政府はわたしに考える時間を与え、政府自らもわたしの意見を検討することにした。それは異例なことだったから、マスコミでも大きく報道され、広い世間にわたしのことが知られることとなつた。

わたしは初めて両親に相談というものをした。わたしがおかれている今の立場とその選択肢を説明し、彼らの意見を求めたわたしに下された彼らの意見はまるで他人のそれのようだつた。

何を正義ぶつたことを言つてゐるの。

それが一人の意見であつた。

わたしはわたしの意見が正しいものであると信じて疑わなかつたので、この言葉にひどい衝撃を受けた。自分の生活を守るためになら多少の犠牲は致し方ないと、そういうことである。わたしは全てがわからなくなつた。

わたしが今、ここに存在する意味。それは両親への責任を果たすためである。けれど、そのために他者を傷つけてもいいのか。自分の信念を捨てられるのか。果たして、わたしに夜叉になる覚悟はあるのだろうか？

4・決意

数日後、混乱するわたしのところに追い討ちをかけるようにあるものが届いた。差出人は不明であったが、その中身を見ればわたしの意見に反対する者であることは一目瞭然だった。

引き金を持つ黒い筒と小さな鉛球。それが小包の中身だった。そしてそれこそが、政府がわたしに求めているものでもあった。

それを初めて手にしたわたしの利き腕はこれ以上ないというほど震えていた。それはとても恐ろしいものだつた。この数日の間、わたしの頭を悩まし続ける元凶であった。けれども、今考えてみれば、それはわたしがこの世に生を受けて以来この手にしたものの中で最も感謝すべき贈り物だつたようにも思える。

数分後、わたしの頭はすっかり冷え切っていた。落ち着きを取り戻したわたしはある決意を胸に約束の場へと足を向けた。

5・終焉

裁判所には予想通り、たくさんの人で溢れていた。皆、報道を聞きつけて集まつた人たちである。たくさんの目の中をわたしはゆっくりと進んでいった。

あまり目立つことを好まないわたしには、地獄で針のむしろの上を歩いているような、そんな気分だった。けれど、わたしの頭はこのうえもなく冴えていた。わたしは一度、上着のポケットに右手を突っ込むと、その中を探つた。そこに硬く冷たいものを確認すると、ほっと息をつく。

大丈夫。うまくやれる。

そう自分に言い聞かせたわたしは決意も新たに自分の舞台へと歩を進めた。

しばらくすると、黒装束に身を固めた男がわたしの目の前にやつてくると、わたしの決意を尋ねた。わたしは一度大きく息を吐くと、ある条件を元に政府の意見に従つことを述べた。黒装束の男は驚くほどあっさりとわたしの提案を呑むと、わたしを新しい一章へと進むことを宣誓した。

わたしはその言葉が終わるのを待つと、生まれて始めて心からの笑みを浮かべた。

その笑みを勘違いした男がわたしに近づいていたとき、わたしはさつとポケットに忍ばせていたあれを取り出すと自分のこめかみに向かつてその小さな引き金を引いた。

パン。

かわいいた音が響くと、あんなにうるさかった喧騒が一瞬にして消え去った。

ああ、やはりわたしは静かな場所が好きだ。

それが永遠の闇が訪れる前に、最後に沸き起こつたわたしの想いだつた。

* * * * *

「ああ、みんなの列車がよひやつと到着したよひですね」

ちょうど老婆の話しが終わったその時、暗闇に一條の光が差し込んだ。皆ゆるりと立ち上るとその光のほうへゆっくりと、だがしつかりとした足取りで進んで行く。

少女もそれにならつて立ち上るとぼろのスカートについた灰色の砂をその小さな手で払い落とす。皆が行く方に向かおうとして、ふ

と立ち止まると言ふと背後にいる老婆を振り返つた。

「どうしたの？早く追い着なさい。でないと間に合わなくなつてしまこますよ」

いつまでも動こうとしない少女に気がついた老婆がそう言つた。けれども少女の足はまだ動こうとはしない。少女は少しためらつたあと、じつと老婆を見つめるところ聞いた。

お婆ちゃんはいかないの、と。

そのかわいらしい声に見えない老婆の顔が一瞬ほころんだような気がしたのは少女の妄想であろうか。

老婆は大きく頭を振ると、私はその列車には乗れないの、と答えた。その答えに少女はがっかりしたような、納得したような複雑な顔をする。

『まもなく扉がします。ご乗車のお客様はお早くお願ひいたします。繰り返します……』

空間にアナウンスが響き渡つた。

「ほら、早くお行き

老婆の言葉に少女は「ぐんとうなずく」と、皆が消えた光に向かつて一歩散に駆け出していく。

やがて光は消え、また空間には元の闇が広がつて、そこには老婆と老婆が腰掛ける椅子だけがあった。老婆は自分にすら聞こえないの

ではないかとつづらつ小聲でつぶやいた。

「私はそれには乗れないの。私は自らその切符を・・・命を絶つてしまつたのだから」

老婆はどうにも行くことはない。今でも。そしてこれからも。

しばらく待てばまたここも、多くの人々で埋め尽くされる。老婆が決して乗ることのない、あの光の列車に乗るために。

(後書き)

いつもとはちょっと違ったダークな話に挑戦してみました。
感想などいただけすると幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1970d/>

自裁

2010年10月28日06時49分発行